

「炎症性腸疾患 潰瘍性大腸炎と Crohn 病のすべて」

東京大学医学部教授・腫瘍外科 武藤徹一郎
 福岡大学筑紫病院教授・消化器科 八尾 恒良 編集
 東京大学医学部助教授・腫瘍外科 名川 弘一
 福岡大学筑紫病院講師・消化器科 桜井 俊弘

京都大学大学院医学研究科・臨床器官病理学/消化器病理学

千 葉 勉

本書を読ませていただいて、これはまさしく現時点でのわが国における炎症性腸疾患のバイブルだと思った。実際本書は、ただ単にすべてを網羅しているというのではなくて、かゆいところに手が届くと言うか、本当に皆が知りたいところを明快に教えてくれる、といった内容になっている。そして、それは極めて適切に、またわかりやすく基礎研究から得られた知識が紹介されていること、また一方、臨床においては病理、内科、外科といったあらゆる方面から、より集学的な観点に立って、診断、治療が語られている、という2点によって大きく特徴づけられている。

本書の読者は大半が消化器病臨床の専門医と考えられるが、私たち臨床医にとっては、臨床の場における診断と治療が最も大切であることは言うまでもない。しかしそれらの質を向上させ、特に新しい、かつ優れた方法を臨床医学に導入していくためには、疫学や、免疫学を中心とした基礎研究から得られた最新の知識をより早く、より貪欲に吸収するこ

とが必須である。特に現在のように、基礎医学の進歩が著しい時代にあつては、臨床医といえどもそうした基礎的知識の修得は今や不可欠である。例えば、最近のノックアウト・マウスやトランスジェニック・マウスを用いた研究から明らかになってきたことは、T細胞系の免疫反応の回路の一部を変化させてやれば、容易に炎症性腸疾患類似の病変が作製できるという事実であるが、このことは炎症性腸疾患の病因を解明するきっかけを得る意味で、またそれを元に予防や治療法を考えていく意味で重要である。更に、一方臨床の場では抗TNF α 抗体が極めて有効であることが明らかとなったが、このように臨床側からも病因論に迫れるようになってきた。本書はこのような最新の情報に基盤をおいた基礎と臨床の対話を、どちらかと言えば臨床家の立場に立って論じていると言える。

一方、臨床の、特に治療の場においては、先の抗TNF α 抗体投与や栄養療法のように、より内科的な治療から、白血球除去療法、更に外科

的手術療法と、役者が出揃いつつある印象を受けるが、今後はますますこれらを統合した、より集学的な治療方針が要求されることは明らかである。そうした意味でも、本書は内科医に外科的治療の重要性を、逆に外科医に内科的治療の重要性を教えてくれるものであり、極めてバランスがとれている、という印象を強く受ける。

上記のような特徴は、序文にも述べられているように、本書がわが国で炎症性腸疾患研究が始まった当初から本疾患の研究と臨床に深く関与され、努力されてこられた方々が中心となって構成され、執筆されていることに依っていることは明白である。炎症性腸疾患の研究、臨床の歴史についての記載もふんだんに盛り込まれており、特に若い人たちにぜひ読んでもらいたい快著である。

● B5 頁320 図90 写真69
 カラー写真71 色図1 表95 1999
 定価(本体13,000円+税) 円400

—医学書院 刊(☎ 03-3817-5657)